

Kāvyaḍarśa —和訳と注釈 (I.1-40)—

東 直 澄

は し が き

作者 Daṇḍin は詩論家あるいは作家としての名声の割には、在世年代、出生地等が、いまだ確定していない。今日までの彼に関する研究では、その年代は8世紀ごろ、南インド出身のバラモンとされている⁽¹⁾。インドの伝承では、「Daṇḍin の三著作は三界に名高い」とされているにもかかわらず⁽²⁾、kāvyā 体の小説 *Daśakumāracarita* (十王子物語)と詩論書 *Kāvyaḍarśa* (詩作の鏡)以外の著作は不明である。第三の作品に関しては様々な説がある⁽³⁾。そのうえ上記の二作品についても、別々の著者によるとされる説も存在する。すなわち Daṇḍin 二人説である⁽⁴⁾。しかしながら、少なくともこの *Kāvyaḍarśa* は、まず Daṇḍin の著作と考えてよい。

Kāvyaḍarśa は、現存するサンスクリット詩論書の中で最も古い段階のものの一つである。第1章105偈、第2章268偈、第3章187偈の三章560偈からなり、韻文で書かれている。そして、様々な修辞法を、一部を除いて殆んど自ら詩作したとされる用例でもって説明している。

テキスト並びに翻訳については、以下のものがある。

- ・ O. Böhtlingk; *DAṆḌIN'S POETIK (KĀVJĀDARṢA) SANSKRIT UND DEUTSCH*, LEIPZIG, 1890.
- ・ P. P. Tarkabāgīśa; *The Kāvyaḍarśa of Śrī Daṇḍin, Edited with commentary* (Bibliotheca Indica, work 40), Calcutta, 1863.

- ・ S. K. Belvalkar ; *Kāvyaadarśa of Daṇḍin, Sanskrit Text and English Translation*, Poona, 1924.
- ・ A. C. Banerjee ; *KĀVYĀDARŚA, SANSKRIT AND TIBETAN TEXTS*, Calcutta, 1939.

和訳に際しては、O. Böhtlingk の校訂本に従って訳し、部分的に他の校訂本も参照した。今回は、紙面の都合上、第1章第40偈までとした。第41偈からの和訳は、別の機会に委ねる。

註

- (1) Daṇḍin の年代決定の中心となる諸説の根拠は、Vāmana (約 A・D 800年頃) より以後に存在するか、Bhāmaha (約 A・D 700年頃) より以後に存在するか、Bhāmaha より以前に存在するかの三点である。最も多くの研究者によって支持されている説が、Bhāmaha → Daṇḍin → Vāmana の順である。代表的な諸説を以下に示す。
 - ・ Vāmana 以後
P. Peterson ; *The Daśakumāracarita of Daṇḍin*, Ed, with critical and explanatory notes, Part II, Bombay, 1891,
Preface. pp. 1—3, p. 8.
 - ・ Bhāmaha と Vāmana の間
S. K. De ; *History of Sanskrit Poetics*, Calcutta, 1976,
(Rep) vol I, pp. 57—69.
 - ・ Bhāmaha 以前
A. B. Keith ; *A History of Sanskrit Literature*, Oxford, 1928,
pp. 296—7.
 - ・ 諸説の全てではないが列記したものに、大類純 ; パーマハとダンディンをめぐりて,
1957, 東洋大学紀要, 第10集がある。
- (2) P. Peterson ; *The Daśakumāracarita of Daṇḍin*, Ed, with critical and explanatory notes, Part II, Bombay, 1891.
preface p. 3.
- (3) A・B・Keith ; *A History of Sanskrit Literature*, Oxford, 1928.
p. 296.
 - ・ Kāvyaadarśa (I. 12) の Chandoviciti は、書名であるという根拠が何一つなく、問題とはならない。→ 訳注12.

- (4) S.K.De ; *A History of Sanskrit Literature*, Classical period, vol. 1, Ed. by S. N. Dasgupta, Calcutta, 1947, pp. 207—9, pp. 531—3.

第1章の梗概

第1章の内容を分類すると、敬礼文（第1偈）、詩論への前置き（第2偈から第9偈）、詩の定義（第10偈から第13偈）、長篇詩の定義（第14偈から第22偈）、散文の特徴（第23偈から第39偈）、ヴァイダルビー体の特徴（第40偈から第102偈）、結語（第103偈から第105偈）の7部分に大きく分かれる。具体的には、次のように示される。

śloka

- 〔1〕 敬礼文
- 〔2〕 kāvyā の定義の成立について
- 〔3, 4〕 言語に対する称讃
- 〔5〕 kāvyā に対する称讃
- 〔6, 7〕 欠点ある kāvyā について
 - 〔8-10〕 詩論の成立について
- 〔11-13〕 kāvyā の韻文による他の文学作品からの区別
- 〔14-22〕 mahākāvya の定義
- 〔23〕 散文の文学作品について
 - 〔24-30〕 kathā, akhyāyikā.
- 〔31〕 散文と韻文の混淆した文学作品について
 - 〔32〕 その使用言語について (saṁskṛt 語, prākṛt 語, apabhraṁśa 語)
 - 〔33〕 saṁskṛt 語と prākṛt 語の関係
 - 〔34, 35〕 prākṛt 語について
 - 〔36〕 apabhraṁśa 語について
 - 〔37, 38〕 文学作品と使用言語の関係

〔39〕 観るための作品と聴くための作品の区別

〔40〕 韻文の二つの文体 (vaidarbhi 体, gaudī 体)

〔41, 42〕 vaidarbhi 体の10の guṇa (kāvyā を成立させる10の属性)

- 〔43, 44〕 śleṣa の guṇa と用例
- 〔45, 46〕 prasāda の guṇa と用例
- 〔47-50〕 samatā の guṇa と用例
- 〔51-54〕 mādhyura の guṇa と用例
 - 〔55-60〕 anuprāsa の定義と用例
 - 〔61-68〕 yamaka の定義と用例
- 〔69-72〕 sukumārātā の guṇa と用例
- 〔73-75〕 arthavyakti の guṇa と用例
- 〔76-79〕 udāratva の guṇa と用例
- 〔80-84〕 ojas の guṇa と用例
- 〔85-92〕 kānti の guṇa と用例
- 〔93-102〕 samādhi の guṇa と用例

〔103, 104〕 kāvyā の成立の原因 (詩作の三条件)

〔105〕 結語

〔凡例〕

- ・原典において省略されている語を追加する場合、並びに和訳において文脈を理解しやすくするために言葉を追加した場合は、〔 〕とした。
- ・術語のローマナイズ、訳語、あるいは、その語の意味する内容については () とした。
- ・Böhtlingk のテキストには、校訂に関して若干の問題が存在するが、ここでは、Böhtlingk のテキストに準拠することを断っておく。

caturmukhamukhāmbhojavanahaṁsavadhūr mama |

mānase ramatām nityam sarvaśuklā sarasvatī || 1 ||

ブラフマー神 (Brahman, 梵天) の口のような蓮華の群の中にいる雌^{*}ハンサ (haṁsa, 白鳥) たるサラスワティー (Sarasvatī, 弁才天) よ、私の心に永久にとどめよ。 || 1 ||

pūrvaśāstrāṇi saṁhṛtya prayogān upalabhya ca |

yathā sāmāthyam asmābhiḥ kriyate kāvyalakṣaṇam || 2 ||

かつての文献を集めて、用例を学び知って、可能な限り我々によって詩の定義は作られる。 || 2 ||

iha śiṣṭānuśiṣṭānām śiṣṭānām api sarvathā |

vācām eva prasādena lokayātrā pravartate || 3 ||

この世界において、全ての方法で知識人たちによって教えられ、また、〔自らが〕学んだ言葉の助けによって、日常生活は始まる。 || 3 ||

idam andhaṁ tamaḥ kṛtsnaṁ jāyeta bhuvanatrayam |

yadi śabdāhvayaṁ jyotir āsaṁsāraṁ na dīpyate || 4 ||

もし、言葉という名の光が永久に輝かないなら、この三つの世界の全ては、暗い闇となるであろう。 || 4 ||

ādirājayaśo bimbam ādarśaṁ prāpya vāṇmayam |

teṣāṃ asaṃnidhāne 'pi na svayaṃ paśya naśyati || 5 ||

太古の王たちの名声の影像是、鏡である文学に著して、彼ら（太古の王たち）が居ないにもかかわらず、それ自身（文学）は、消えない。|| 5 ||

gaur gauḥ kāmādughā samyak prayuktā smaryate budhaiḥ |
duṣprayuktā punar gotvaṃ prayoktuḥ saiva śaṃsati || 6 ||

知識人たちによって、正しく使われた言葉は、願いをかなえる乳牛であるといふ。しかしながら、悪く使われた言葉は、作者が〔単なる〕牛の性質〔すなわち乳牛でない牛〕を示すように。|| 6 ||

tadāpam api nopekṣyaṃ kāvyē duṣtaṃ kathaṃ cana |
syād vapuḥ sundaram api śvitreṇaikaena durbhagam || 7 ||

詩においては、欠点が〔たとえ〕わずかでも、見落とされるべきではない。美しい身体であっても、一つの白癩〔の斑点〕によって醜くなるであろう〔からである〕。|| 7 ||

guṇadoṣān aśāstrajñāḥ kathaṃ vibhajate janaḥ |
kim andhasyādhikāro 'sti rūpabhedopalabdhiṣu || 8 ||

優れたものと劣ったものを、無知な人はどのように、区別するのか。形態の違いを知覚する場合、盲目の人の能力は、存在するのか。|| 8 ||

ataḥ prajānāṃ vyutpattim abhisamdhāya sūrayaḥ |
vācāṃ vicitramārgāṇāṃ nibabandhuḥ kriyāvidhim || 9 ||

そこで知識人たちは、〔詩人としての〕^{*}教養を見出すことを志して、様々な文体の構造について、著作方法を編集した。|| 9 ||

tailḥ śārīraṁ ca kāvyānām alambkāś ca darśitaḥ |
śārīraṁ tāvad iṣṭārthavyavacchinnā padāvali || 10 ||

彼ら（知識人たち）によって、詩の骨組と修辞は、示された。骨組とは、それが望んでいる意味によって区別された語の連続である。|| 10 ||

padyaṁ gadyaṁ ca miśraṁ ca tat tridhaiva vyavasthitam |
padyaṁ catuṣpadi tac ca vṛttaṁ jātir iti dvidhā || 11 ||

それ（骨組）は、韻文と散文と〔韻文と散文の〕混淆した〔文〕の三種に分類される。韻文は、四部分（四句）からなり、そしてそれ（韻文）は、^{*}ヴリッタ（vṛtta, 韻律の種類名）とジャーティ（^{*}jāti, 韻律の種類名）との二種である。|| 11 ||

chandovicityāṁ sakalas tatprapñco nidarśitaḥ |
sā vidyā naus titirṣūṇāṁ gambhīraṁ kāvyasāgaram || 12 ||

^{*}チャンドーヴィチティ（chandovicitī, 韻律学）において、完全なその（韻文の）詳細は、示される。その（チャンドーヴィチティの）知識は、深い詩の海を渡りたい人々の舟である。|| 12 ||

muktakaṁ kulakaṁ kośaḥ saṁghāta iti tādrśaḥ |
sargabandhāṅgarūpatvād anuktaḥ padyavistarāḥ || 13 ||

サルガバンダ (sargabandha, 章分けされた作品) の一部分であるという性質から、ムクタカ (muktaka, 意義の完結した独立のシュローカ)、クラカ (kulaka, 3つ以上のシュローカの結合した一文)、コーシャ (kośa, 詩華集)、サムガータ (saṁghāta, 同じ韻律の長篇詩) という、そのような韻文の詳細は、ここでは語らない。 || 13 ||

sargabandho mahākāvyaṃ ucyate tasya lakṣaṇam |
āśīrnamaskriyā vastunirdeśo vāpi tanmukham || 14 ||

サルガバンダは、マハーカーヴィア (mahākāvya, 長篇詩) と呼ばれる。その特徴は、祝福、敬礼、あるいはまた、主題表示がその冒頭をなす。 || 14 ||

itihāśakathodbhūtam itarad vā sadāśrayam |
caturvargaphalopetaṃ caturodāttanāyakam || 15 ||

〔マハーカーヴィアは〕^{*}イティハーサ (itihāsa, 古説話) の物語から生じ〔すなわち題材をとり〕、またそれ以外は、事実に基づく。主人公は、人生の四つの目的に至り、魅力的で、高尚である。 || 15 ||

nagarārṇavaśailartucandrārṅkodayavarṇanaiḥ |
udyānasalilakriḍāmadhupānaratotsavaiḥ || 16 ||

町、海、山、季節、月の出、日の出の描写によって、苑林での水遊び、酒宴、恋愛の饗宴によって、 || 16 ||

vipralambhair vivāhaiś ca kumārodayavarṇanaiḥ |
mantradūtaprayāṇājīnāyakābhyudayair api || 17 ||

別れ、そして結婚、王子の誕生の描写によって、また、会議、使者、出征、戦い、主人公の勝利によって、 || 17 ||

alamkṛtaṁ asaṁkṣiptaṁ rasabhāvanirantaram |
sargair anativistīrṇaiḥ śravyavṛttaiḥ susaṁdhibhiḥ || 18 ||

飾られ、簡略でなく、^{*}ラサ (rasa, 情緒) と^{**}バーヴァ (bhāva, 感情) を継続し、章は長くなく、快適な韻律で、よいサンディ (^{***}saṁdhi, 物語の展開) で、 || 18 ||

sarvatra bhinnavṛttāntair upetaṁ lokarāñjakam |
kāvyam kalpāntarasthāyī jāyeta sadalamkṛti || 19 ||

^{*}〔章の〕終りごとに韻律は変わり、人々を喜ばせる本当の修辞をもつ詩は、世界の終りを越えて永久に存在する。 || 19 ||

nyūnam apy atra yaiḥ kaiścid aṅgaiḥ kāvyam na duṣyati |
yady upātteṣu saṁpattir ārādhayati tadvidah || 20 ||

また詩は、欠点があっても、その部分によって害されない。もし長所が含まれるなら、それは、専門家から〔それなりの〕評価を与えさせる。 || 20 ||

guṇataḥ prāḡ upanyasya nāyakaṁ tena vidviṣām |
nirākaraṇam ity eṣa mārگاḥ prakṛtisundarah || 21 ||

〔主人公の〕善良な性質に従って、最初に主人公を述べて、彼による敵の撲滅がある。ということは、これが本来正当な様式である。 || 21 ||

varṇśavīryaśrutādini varṇayitvā ripor api |
tājayān nāyakotkarṣavarṇanāṁ ca dhinoti naḥ || 22 ||

敵対者についても、血統や勇気や学識等を描写して、彼（敵対者）を征服するから、主人公の優れた記述は、我々を満足させる。|| 22 ||

apādaḥ padasarṁtāno gadyam ākhyāyikā kathā |
iti tasya prabhedau dvau tayor ākhyāyikā kila || 23 ||

韻律のない語の連続は、散文である。^{*}アーキアーイカー（ākhyāyikā、説話）と^{*}カター（kathā、物語）は、その内の二種である。その二つの内のアーキアーイカーは、次のように言われる。|| 23 ||

nāyakenaiva vācyānyā nāyakenetareṇa vā |
svaguṇāviṣkriyā doṣo nātra bhūtārthaśarṁsinaḥ || 24 ||

〔すなわち〕主人公によってのみ話される。他（カター）は、主人公によっても、他の人によっても、〔話される〕。実際に起った事を話すから、ここでは、自らの長所、欠点は、示さない。|| 24 ||

api tv aniyamo dṛṣṭas tatrāpy anyair udīraṇāt |
anyo vaktā svayaṁ veti kidṛg vā bhedalakṣaṇam || 25 ||

しかしながら、そこにおいて（アーキアーイカー）は、他の人々（主人公以外の人々）によって〔主人公として〕話されるから、〔読者によって〕制限がないと見られる。他の人（主人公以外の人）が語り手か、〔主人公〕自らが語り手かということは、どのような区別〔の基準〕であるのか。|| 25 ||

vaktraṁ cāparavaktraṁ ca socchvāsatvaṁ ca bhedakam |
cihnam ākhyāyikāyās cet prasaṅgena kathāsv api || 26 ||

もしアーキアーイカーの区別する特徴が、* ヴァクトラ (vaktra, 韻律名),
** アパラヴァクトラ (aparavaktra, 韻律名), そして, ウッチュワーサ (ucchvāsa,
章に区分すること) をもつという事であれば, 時々カターの中でさえ, それら
が存在するではないか。|| 26 ||

āryādivat praveśaḥ kiṁ na vaktrāparavaktrayoḥ |
bhedaś ca dṛṣṭo lambādir ucchvāso vāstu kiṁ tataḥ || 27 ||

* アールヤ (ārya, 韻律名) 等のように, ヴァクトラとアパラヴァクトラの範
囲が, 何故存在しないのか。そしてランバ (lamba, 巻に区分すること) 等や
ウッチュワーサの区別が, 「カターの中に」見られる。そこに何が存在するの
か。|| 27 ||

tat kathākhyāyikety ekā jātiḥ samjñādvayāṅkitā |
atraivāntarbhaviṣyanti śeṣās cākhyānajatayaḥ || 28 ||

それゆえに, カターとアーキアーイカーは, 一つの種類が二つの名前によっ
て数えられたものである。そしてここ (散文) に「カターとアーキアーイカー
の」残りの叙述の種類が, 含まれるであろう。|| 28 ||

kanyāharaṇasaṁgrāmaṁvipralambhodayādayaḥ |
sargabandhasamā eva naite vaiśeṣikā guṇaḥ || 29 ||

少女誘拐，戦争，詐欺，繁栄等〔という内容〕は，サルガバンダに類する。これらは，けっして独特の性質ではない。 || 29 ||

kavibhāvakṛtaṁ cihnam anyatrāpi na duṣyati |
mukham iṣṭārthasaṁsidhau kiṁ hi na syāt kṛtātmanām || 30 ||

特徴は，詩人の感情によって作られる。一方それはまた欠点とならない。つまり目的を達成することに成功した時，知識人たちにとって，何が始まりとして存在できないであろうか。 || 30 ||

miśrāṇi nāṭakādīni teṣāṁ anyatra vistarāḥ |
gadyapadyamayī kācic campūr ity abhidhiyate || 31 ||

〔韻文と散文の〕混淆した〔作品〕は，ナータカ（nāṭaka，戯曲）等である。その詳細は，他の機会に〔論ぜられるであろう〕。散文と韻文によって形成されたものは，チャンパー（campū，カーヴィア体の詩節と散文を交互，同等に使用する作品）と呼ばれる。 || 31 ||

tad etad vāṇmayam bhūyaḥ saṁskṛtaṁ prākṛtaṁ tathā |
apabhraṁśaś ca miśraṁ cety āhur āryāś caturvidham || 32 ||

この言葉からなるもの（文学作品）は，一般に，サンスクリット，^{*}プラークリット語，また，^{*}アパブランシャと混淆した〔言語〕という四種類のもので〔書かれている〕と尊敬すべき人々は，言った || 32 ||

saṁskṛtaṁ nāma daivī vāg anvākhyātā maharṣibhiḥ |
tadbhavas tatsamo deśīty anekāḥ prākṛtakramāḥ || 33 ||

大聖者たちは、サンスクリット語と呼ばれるものが神々の言葉であると解釈した。〔サンスクリット語の〕タッドバワ (tadbhava, 派生語)、タットサマ (tatsama, 類似語)、デーシー (deśī, 方言) とは、様々なプラークリット語の段階である。 || 33 ||

mahārāṣṭrāśrayāṁ bhāṣāṁ prakṛṣṭāṁ prakṛtāṁ viduḥ |
sāgarāḥ sūktiratnānāṁ setubandhādi yanmayam || 34 ||

マハーラーシュトラ族が使用する言葉〔すなわちマハーラーシュトリー語〕が優れたプラークリット語であることを、人々は、知った。格言の宝石の海であるセートゥバンダ^{*} (Setubandha, 橋の建設) 等が、その言葉からなる。 || 34 ||

śaurasenī ca gauḍī ca lāṭī cānyā ca tādṛśī |
yāti prakṛtam ity evaṁ vyavahāreṣu saṁnidhim || 35 ||

シャウラセーニー語、ガウディ語、ラーティ語、他のそれらに似た語は、プラークリット語〔という名前〕で慣用的に表わされる。 || 35 ||

ābhīrādīgarāḥ kāvyēṣv apabhraṁśa iti smṛtāḥ |
śāstreṣu saṁskṛtād anyad apabhraṁśatayoditam || 36 ||

詩の中では、^{*}牛飼等の言葉は、アパブランシャ語と呼ばれた。〔文学作品以外の〕文献の中では、サンスクリット語以外の言葉が、アパブランシャ語という言葉で言われた。 || 36 ||

saṁskṛtāṁ sargabandhādi prakṛtāṁ skandhakādikam |
āsārādīny apabhraṁśo nāṭakādi tu miśrakam || 37 ||

サルガバンダ等は、サンスクリット語〔で書かれて〕、スカンダカ (skandhaka, 韻律名) 等〔による作品〕は、プラークリット語〔で書かれ〕、アーサーラ (āsāra, 韻律名) 等〔による作品〕は、アパブランシャ語〔で書かれ〕、ナータカ等は、〔それらの言語の〕混淆したもので〔書かれている〕。|| 37 ||

kathāpi sarvabhāṣābhīḥ saṁskṛtena ca bādhyate |
bhūtabhāṣāmayīṁ prāhur adbhutārthāṁ bṛhatkathām || 38 ||

またカターはあらゆる言葉によって作られている。そして、サンスクリット語によっても。〔人々は〕、不思議なものであるブリハットカター (*Bṛhatkathā*, 長篇物語) が幻の言葉からなるものであると言う。|| 38 ||

lāsyacchalitaśālyādi prekṣārtham itarat punaḥ |
śravyam eveti saiśāpi dvayī gatir udāhṛtā || 39 ||

ラースヤ (*lāsyā*, 歌と楽器による舞踊), チャリタ (*chalita*, 身振り狂言), シャルヤー (*śalyā*, 楽器による舞踊) 等は、観るためのものである。一方において、それら以外のものは、聴くためのものである。ということは、これもまた、2種類であると呼ばれる。|| 39 ||

asty aneko girāṁ mārgaḥ sūkṣmabhedāḥ parasparam |
tatra vaidarbhagaudīyau varṇyete prasphuṭāntarau || 40 ||

互いに小さな差異をもつ文体が、様々存在する。その中に、ヴェイダルビー体 (*vaidarbhī*, 単純・明瞭・快適な文体) とガウディー体 (*gaudī*, 莊嚴・晦渋な文体) が明白な区別として記述される。|| 40 ||

註

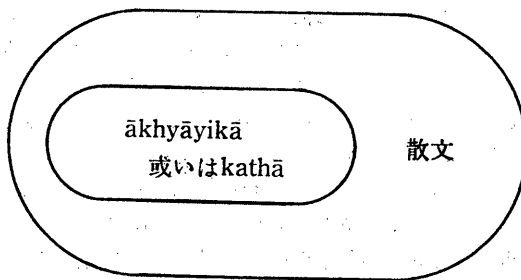
- V.1 * hamśa 白鳥と訳出したが、鷺鳥ともいわれ、生物学的に現在のどの鳥を示す言葉であるかは不明である。この問題については、Cf. 長柄行光；サンスクリット文学における HAMSA について、印仏研、17巻 2号、昭和44年、pp.609—164.
- 9 * vyutpatti 同章103偈に詩人である主なる三条件として、pratibhā (想像力), śrutam (教養), abhiyoga (詩作実修) が記述されている。vyutpatti は、śrutam に相応する。くわしくは、Cf. 上村勝彦；インド古典詩論における詩作の条件、東方学、No. 43, 1972年、pp. 1—18.
- 11 * vṛtta, jāti サンスクリット語の韻律は、長・短によって決定される。短は、短母音を含む音節、長は、長母音、二重母音、短母音であっても母音の後に2つ以上の子音が続く音節である。そして韻律を三大別すると次の二つに分類される。vṛtta (akṣara-cchandas ともいう) akṣara とは、音節という意味で、長短の音節数とその位置によって決定される韻律。
jāti (mātra-cchandas ともいう) mātra とは、単母音を発するための時間単位を表わし、短を 1 mātra、長を 2 mātra とし、mātra の数によって決定される韻律。
- 12 * chandoviciti Daṇḍin が Kāvya-darśa の付録として著作する予定であった書物、あるいは、Kāvya-darśa 以前に成立した現存しない韻律学の書物、また単に韻律学、韻律を意味するという二説に分かれている。Winternitz は、インド文献史の中で韻律学とし(中野義照訳、インドの純文学、1966年、p. 11), Jacobi は、Daṇḍin の著書とし (Indische Studien, 17, 442ff), Kane は、韻律と理解している (Indian Antiquary, 40, 177f)。
- 15 * itihāsa ここでは、Rāmāyana と Mahābhārta を示す。
- 18 * rasa 一般に8種ある
** bhāva rasa に対応する

	1	2	3	4	5	6	7	8
rasa	śṛṅgāra	raudra	vīra	bībhatsa	hāsyā	karuṇa	adbhuta	bhayanaka
bhāva	rati	krodha	utsāha	jugupsā	hāsa	śoka	vismaya	bhaya

*** saṁdhi 発端・進展・発展・停滞・大団円 サンスクリットの物語には、悲劇はなく全て大団円で終る。

- 19 * bhinna-vṛtta-antair Kāvya-darśa 成立以前の初期の kāvya においても、この傾向は、見られる。例えば、Aśvaghoṣa の Saundarananda において、各章最後の数偈の韻律は、変化している。

- 23 * ākhyāyikā, kathā 説話並びに物語と訳出したが、これら二語の概念を明確に定義することは、ほとんど不可能である。例えば, Bāna (7世紀)は, *Harṣacarita* (Harṣa 王の伝記を中心とする詩) を ākhyāyikā とし, *Kādambari* (歴史性のない伝奇小説) を kathā としている。また Kṣemendra (11世紀) は, *Bṛhatkathāmañjarī* の主話を kathā とし, 挿入された物語を ākhyāyikā と言っている。辻直四郎 (サンスクリット文学史, 岩波全書, 1973年, p. 115), Winternitz (前出インドの純文学 p. 269) 両氏も区別不可能としている。同章第28偈の内容から考えると、共に散文の概念の中の一部であり、同じものを指すと考えられる。



- 26 * vaktra śloka を詩論家は, vaktra と呼ぶ。
- ** aparavaktra 11音節の2句と交替する12音節の2句を1偈とする韻律。
- 27 * ārya 第11偈註の mātra-cchandas による韻律。
- 32 * ここで述べられている prākṛt 語, apabhraṃśa 語は, 近代言語学でいう各々の語群を示すものではない。すなわちサンスクリット語の規範を中心に考え, 規範の崩れている言語群を, 崩れる度合によって, prākṛt 語, apabhraṃśa 語としたのである。参照第33偈
- 34 * *Setubandha* カシミールを治めていた Pravarasena II (約5世紀ごろ) あるいは, 彼の宮廷詩人による mahārāṣṭri 語で書かれた作品を指すと思われる。
- 36 * ābhira apabhraṃśa 語の由来が ābhira 族の言葉であるとする学説もあるが, 疑わしく, 両語の関係についても諸説あり, ここでは言語名 (ābhira 語) とせず, 単に牛飼と訳出しておく。
- 38 * *Bṛhatkathā* 内容・言語に関しては不明である。Guṇādhya (年代不明) なる人物によって, prākṛt 語の一種で書かれたとされる説話集を指すと考えられる。
- 40 * vaidarbhī 体, gaudī 体 長い合成語, 響きの強い音, 比喩, 対句等を多く使用することを特徴とし, より修辭的な文体を gaudī 体, それとは反対に, 単純で文脈の理解しやすい文体が vaidarbhī 体である。

- 1—40 *Kāvyaḍaṁkāra* との類似点 はしがき註(1)の中で述べたように、年代論において、Bhāmaha と Daṇḍin の先行問題がある。その一つとして *Kāvyaḍarśa* と *Kāvyaḍaṁkāra* の類似点である。40偈までを例示する。(*Kāvyaḍaṁkāra* は、P・V・Naganatha Sastry; *KĀVYĀLAṆKĀRA OF Bhāmaha, Edited with English Translation and Notes*, Delhi (2nd. Ed), 1970. に準拠する。)

sargabandho mahākāvyaṁ mahatā ca mahac ca yat /

Kāvyaḍarśa (I. 14. a)

agrāmyaśabdam arthyam ca sālaṅkāraṁ sadāśrayam // (I. 19)

mantradūtaprayāṇajināyākābhyudayaś ca yat /

Kāvyaḍarśa (I. 17. c. d の一部)

pañcabhiḥ sandhibhir yuktaṁ nātivyākhyeyam ṛddhimat // (I. 20)

kaver abhiprāyākṛtaiḥ kathanaiḥ kaiścid ankitā /

kanyāharaṇasaṁgrāmaṁ pralambhodayānvitā // (I, 27)

Kāvyaḍarśa (I. 29. a. b の一部)

これらの共通部分は、全て *sargabandha* の一般的内、容特色、別名について述べたものであり、修辞学上の定義、Daṇḍin, Bhāmaha に見られる共通の概念でもない。すなわち、これらの共通部分は、二書における引用関係、あるいは、また以前に成立した現存しない原典からの引用等が、この3偈のみを比較する限り、論究できない。

参 考 文 献

- ・A・K・Warder ; *Indian Kāvya Literature*, vol. I, vol. II, vol. III, Delhi, 1972, 1974, 1977.
- ・A・B・Keith ; *A History of Sanskrit Literature*, Oxford, 1928.
- ・S・K・De ; *History of Sanskrit Poetics*, Calcutta (Rep.), 1976.
- ・大類純：パーマハとダンディンをめぐりて、東洋大学紀要, No. 10, 1957.
- ・上村勝彦：インド古典詩論における詩作の条件、東方学, No. 43, 1972.

※紙幅の都合上サンスクリット語以外の韻律、言語に関して、論究しなかった。別の機会を期したい。(1983年, 11月)

(文学研究科博士後期課程・佛教學専攻)